

自由と革命

1

反権力・絶対自由
国家制社会を解体し。
評議制社会を樹立せよ！

アナキスト革命連合【ARF】

1969·1 1·15

自由と革命

発行／アナキスト革命連合（A R F）

1969.11.15

（目次）

＊ 提言	1
＊ アナ的革命家へのアプローチ	3
＊ 10.2 阪芸大斗争をめぐって	5
＊ 何をなすべきかの前に —修正「アナキズム」批判—	7
＊ 9・23 集会批判声明	15
＊ 10・21 北大阪叛乱－11月全都総叛乱へ 怒濤の進撃を開始せよ！	19
＊ 10・21 斗争を社会革命運動の第一歩とせよ！	21

提

言

池田利義

創出。既成アナ研の体質の変革。

5. 斗争グループ

斗争評議会の責任において斗争グループの形成。斗争グループを通しての斗争におけるヘゲモニーの獲得。

秋期斗争直後に予定される第四回総会において A.R.F. は質的転

位をもつて登場せねばならない。ここにおいて A.R.F. は 綱領 をもつて登場せねばならない。ここにおいて A.R.F. は 綱領 の把握において 運動方針 を獲得する必要がある。ために具

体化しなければならないと考えられる過渡的方向を要項的に列挙

してみたい。これらの内実の形成過程こそは A.R.F. にとって質的

飛躍そのものに他ならない。

1. 思想性の確立

反権力・絶体自由・国家制社会を解体し、評議制社会を樹

立せよ！ として規定された原則スローガンの深化。これ

は機関紙を通じて公然となざることが必要。

2. 組織性の確立

非合法活動の準備。武器の準備と行動の計画性。攻撃・防衛における基本訓練。

4. 地区アナ研

各地区評議会の責任において斗争主体としての各地区アナ研の

総武装を獲得せよ！

5. 斗争グループ

斗争評議会の責任において斗争グループの形成。斗争グループを通しての斗争におけるヘゲモニーの獲得。

6. 宣伝・煽動・暴露活動の強化

機関紙月刊の確保。ビラ活動の強化拡大。単位組織における独自活動の形成と確立。麦社バンフの利用。

7. 新左翼諸派の革命的解体のための斗争

系統的批判活動の形成強化。思想斗争から出発。

8. 反安保状況斗争の革命的推進のための斗争

斗争領域の創出。革命的質を斗争戦術との連関において行動戦術によるプロバガンダとして形成。

9. 全国アナキスト革命派との交流

発行物の交換、連合行動の推進等から始めて、全国連合の早期

実現へ。

10. 全関西アナキスト救援斗争委員会の結成

11. 情報収集、資料整理、財務の計画的拡大等。

* * *

同志諸君！

全国のアナキスト諸君！

全関西のアナキスト・革命的無党派諸君！

第一に思想的に武装せよ！

情念の水準から思想の水準へ、反逆の水準から革命の水準へ、主体的実質を形成し質的飛躍を獲得せよ。△△反権力・絶対自由・国家制社会を解体し、評議制社会を樹立せよ！△△という原則スローガンの下に、世界社会革命の実現運動主体として、自ら革命思想としてのアナキズムを形成し体得することなしには、いかなる行動も運動とはなりえない。無限革命への苦難の思想的嘗為を主体的にになうことなしには、いかなる思想的武装もありえない。国家制社会の解体とは、既成の一切の社会構造そのものの解体であり、権力関係の総体的表現としての国家の、政治権力としての政府、地方自治体、税務所等の、経済権力としての資本・経営、工場等の、更には文化権力としての新聞、放送、大学、高校等の解体であり、そして権力構造の原基形態としての家（地縁権力としての家庭・血縁権力としての家族）それ自体の解体なのである。A.R.F.の運動は、地縁と血縁からの完全解放を実現する運動であり、国家制社会を根源的に総体的に解体せしめずにはおかない社会革命運動である。

評議制社会の樹立とは、△△反権力・絶対自由△△の原理的質に

おいて、社会関係としての社会組織そのものを再編することであり、人民の自治管理、人民の自由連合を絶対自由の個を原点として、眞の個人主義＝社会主義を実現することであり、共同生活体を生産共同体として合体せしめる評議制を社会構造として形成し樹立することである。A.R.F.の運動は、個人の絶体自由を獲得せんとする、従つて評議制社会を個人の関係性の必然として、成立させずにはおかない社会革命運動である。

第二に組織的に武装せよ！

思想を具象化させる過程が運動であり、運動が関係性であるからには、われわれはそれを組織性として定立させ自らを組織しなければならず、自らを組織することなしにはいかなる行動も運動とはなりえず、一切の過程はゼロと化さざるをえない。意識における内発的な一挙的無限性を社会における状況的な過程性へと合体連続させえるものは、明らかに質的関係性を強化し拡大しうる組織運動として以外ではありえない。A.R.F.はそれ自体において組織運動を創出し展開するところの根拠点として、組織であり、運動であり、評議会である。

運動性が意識するしないにかかわらず明らかに組織性であるからには、われわれは自ら組織的に武装することなしにはいかなる運動も創造することはできないのである。個的水準における自由連

合という関係性と組織性は、共に組織運動を主体的に形成するか

ざりにおいてしか実在しないのであり、単なる行動の一一致とか、

あるいはサロン・サークルの内には、基質的に形成することも成立することもありえない関係性なのである。

第三に軍事的に武装せよ！

思想を意緒的に関係性としての運動を通して具象化せしめる社会

化過程は、時と所をえらばぬ激烈な斗争の連續としてあるが故に、運動は思想的組織的に武装するだけでは現実化しえないのであり、

日常的な軍事性が必要不可欠のものとして提出されているのであ

る。まさしく全人民の軍事的総武装は、自らが軍事的に武装することによつてしか開始されないものである。われわれは自己の主

体的力量において可能などあらゆる軍事的武装を、現在的に研究し生産し収奪して獲得し、これを永続的に確保しなければならない。

かかる重要な任務を遂行しうる集団のみが、現実の社会革命運動になうことができるのであり、これを計画的に実践しえない一切の集団は自滅する位ないだろう。

A.R.F.は武装する。思想的組織的軍事的に総武装しなければならない。思想も組織も軍事もそれぞれに重要な具体的武器であるが故に、これらを三位一体として主体化せしめる社会革命運動組織として、A.R.F.は不斷に強化され拡大されるのでなくてはならな

い。

全国のアナキスト諸君！

全関西のアナキスト・革命的無党派諸君！
△反権力・絶対自由・国家制社会を解体し、評議制社会を樹立せよ！

△△ という原則スローガンの下に、自らA.R.F.を主体的に形成し、断固として思想的組織的軍事的武装——総武装を獲得せよ！

(六九・一〇・三)

「アナ的革命家へのアプローチ」

堺 まさお

世間一般にいう「革命家」とは、いさきか偶像化されており、そのイメージは「マンガ的」でもある。その偶像化された革命家は、冷酷、冷厳で理論や戦略にたけており、かかる戦斗においては獅子奮迅の働きをするといったものであるが、これ以上に「マンガ的」であるのが現実の斗争における新左翼の自称、他称の革命家である。スキジユール斗争のときのみ火炎瓶の二、三本を手にもち機動隊や路上に投げ脱兎のごとく遁走し、無事に明日になれば公安の監視下に

ない。思想も組織も軍事も名が無い。

命家である。無事に明日に手にもち機動隊や路上に投げ脱兎のごとく遁走し、

故に、これらを三位一体として主体化せしめる社会革命運動組織として、A.R.F.は不斷に強化され拡大されるのではなくてはならぬ。

なれば公安の追求にビクビクしながら日々を過ごし、次のスケジュール斗争まで誇大妄想狂的にやれない斗争を妄想し、結局は前斗争と変りない結果となり、これをいつまでもくりかえす様は、まさに“マンガ的”でしかないのだが、これと同じニュアンスが我々A.R.F.に若干なりともあることはゆがめない事実ではなかろうか。だが、ほくには、この若干の事実に対する責任を追求する資格はまつたくなく、こうしてアナキストとして文を書くことすら空々しいのである。それは過去においてほくが斗える状況にありながらも斗わなかつた自己責任がある。この自己責任を主体的に解決していくには、まさに自分自身が今から斗うしかないのである。それは思想的に、また軍事的にA.R.F.内部において位置づけされなければならない。位置づけされることにより、よりラジカルに真の革命家としてのアプローチをこころみるつもりである。ほくの権力に対する斗いは、今やつと始まつたわけで、斗いをするならば当然、ほくなりの斗争を指向し、普遍的に斗わなければならぬわけで、その主体はA.R.F.であり、まさにアナキズムである。だがほくのアナリストとしての経験は稀薄であり、多くの疑問点があると思う。これについては自分自身がA.R.F.の主体性をもつて客観的解決をはかりたいと思つてゐるので諸兄の徹底的な問題点指摘を望むところである。

以上のべたところで次の四点を真の革命家へのアプローチとして自己に対し提起したが、部分によつては対外的には今まで何度もいくつもされたこともあり、いささかピントはずれの気がしないでもないが、あくまで自己のものとしたい。また他の部分においては誇大忘想狂的発想が感じとられるムキもあるが、この提起に關し、自己には一切のあいまいさがないことをここで確認しておく。

① もはやスケジュール斗争は革命家としてはなんら意味をなさない。ただ他の新左翼がスケジュール斗争を開拓する際には状況としてとらえ、アナキズムなりの斗争を確立する。アナキストとしては日常的に広範囲にわたり総乱状態を作る。この状況を作りうる可能性としてはゲリラ戦をおいてほかにはないと思われる。

② 完全武装の獲得。これは権力に対し力関係を対等にする意味でも絶対に高水準の武器が必要とされるため、これらの獲得。

③ 権力の露骨な弾圧に対し地下運動組織の確立。また、権力の側に同志が捕えられた場合、奪還斗争をゲリラ的に行なう。

④ 以上三点の軍事的斗争と平行し、思想的組織的飛躍のために斗争主体のアナ研創出、全国連合の確立。

以上四点が力量的可能性を云々することなく普遍的に行ないうべく、今後の斗争を開拓していくかなければならないのではない

か々

10・2阪芸大斗争をめぐつて

三 条 武

(1) 全国の学園斗争は、東大の安田講堂をめぐる攻防戦以来、全国に急速にその火の手が、あえあがると同時に、あらゆる学園に、様々な形で、問題を提起した。

この大半の学園紛争は、単に学園秩序の改革にとどまらず、必然的に、政府にそして、あらゆる権力に対しても向けられた。

10・2の芸大における斗争も、単なる学園内にだけとどまらない。内面的には、国家権力に対する叛逆の一環としての、十分な要素をも含み得ていたと思う。

それを、全学バリケードと云う形でもつて行い、全国の学園斗争に呼応し、終局的には、政府を危機に立たせ、国家権力の実体をあばかせるものであつた。

結果的には、全面的な状勢判断と把握の甘さが、行動面に於ても全員の意志統一もほとんどない今まで敢行した事により、あつけなく検挙され、あきらめの感じで、自供にもとづく逮捕さ

れることからも、全く敗北であつた。

素直に言つて、この芸大斗争に関しては、何ら総括しえないほど、目的は達成されず、無意味な斗争でしかなかつた。

このことで、精神的には、少々動搖しており、さらに、先の国際反戦デーにも、何ら大阪の地に於ては、国家権力の壁を、突破する動きさえできなかつたことで、失望しショックを受けたが、今はどうにかそれは克服できた。そして、あのぶざまな斗争を、顧みて、理論的にも、実践的にもいい反省材料になつた。

（2） 峰 太

東大、日大斗争に於いて数多くの新運動を開拓して来たのは全共闘、八派連合など新左翼に依つてなされて來たが、アナキストは個人、小グループとして、新左翼が引いた路線に乗つて又、組み込まれて斗つて來たが、これからはアナキズムを前面に出して独自の斗争を組む機会に到達している。

独自の斗争の一つが芸大斗争、この斗争にはこれから運動の展望と共に今までのアナキストの行動の欠陥が現われている。一般社会に学園斗争が起りそうにもないと思われている学園に、

実状斗争を発生させる事は一般社会に学園、即ち教育教構の矛盾を暴露する。これを生産点等に活用することも出来る可能性が有る、生産点その他の職場に突然封鎖占拠することに依つて、ゼネ

全員の意志統一もほとんどされないと、
あつけなく検挙され、あきらめの感じで、自供にもとづく逮捕さ

ストと違う新しい行動形態である、この新形態に依つて反権力（國家権力）斗争を斗うことは、勝利が不可能であつても大打撃を与える事が出来、一般大衆潜存的反権力意識をもつと向上させ得ると思う。

この新形態の斗争が出来得るまでは日常の地味な運動と長い年日をかけた計画と採束の展望も必要とすると思うが、社会が革命の数歩手前にある時には、少數部分が突出して、行動して、結果として敗れても、大衆に反権力斗争運動の存在とその宣伝も出来る。

芸大斗争が敗れさつたのは、戦後二十数年アナキズム運動をほとんど何もしえなかつたアナキストとの類似点が見出せる、又戦前から現在までのアナキストの行動に見出せる、一揆主義なものもこの斗争に含まれているのとこれに関係したアナキストのあいまいさと状況の把握の甘さが敗北に繋がり、今だにこの斗争の総括がなされない要因であると思う。

〔直接定期購読のお願い〕

A R F 革命機關紙「自由と革命」は月刊を維持しつつ早期に月二回刊を実現する予定ですが、各号の頁数が不定のために領価も定額にすることができません。このため直接定期購読の申込みは千円単位としていただきますが、この場合一割引にて清算し各号発行毎に残額を通知いたします。確実に入手するためにも本紙の読者すべてに直接定期講読の申込みをお願いしたいと思います。

“何をなすべきか”の前に

すべきかという課題とを結合させたいと思う。さすは“何をなすべきか”的前に、である。

—修正「アナキズム」批判—

池田和義

1. 国家にふれて
2. 革命にふれて
3. 評議会にふれて

△国家にふれて▽

UGACの国家観における欠陥は、手紙の中の“西と東”に集中的に露出されている。

UGACが「世界の同志への手紙」の中で展開したあれこれの情勢分析と彼らの革命觀は、極めて混乱した様相を示しているのであるが、それはとりわけ歴史的事実の誤認となつてここでは表出されている。“世界において△成功▽”したすべての革命がマルクシズムにもとづいているのは事実である。“かかる事實認識は、最も基質的な鍵点を疑わしむるに十分でありそれは手紙のサブタイトルが“何をなすべきか”であるにもかかわらず、何をなすべきか”ということが不明確であるというところにも示されている。

UGACは、ユーロースラビアその他の非同盟諸国によつて形成される第三戦線の支持者であると言明する。ここに明白に表示されているUGACの態度は、先の体制間レベルの分析を前提として、より大きな権力構造に対抗するより小さな権力構造の支持ということである。しかもこの小さな権力構造たるや、無限できることならばこの作業によつて、自己の立場の形成と何をな

以下三章にわけて、手紙の検討を通して問題の所在を明らかに

に大きくなることを目的とする権力構造なのである。

命、全くの反アナキズムがここには歴然としている。しかも UGAC は、第三戦線と植民地革命を二重写しにすることで己を慰めているのであるが、UGAC が **△若きレジスタンス** の宣言を自からものであると言ひきる時、そこに何があるのだろうか。

△若きレジスタンス は言う。“被抑圧階級の闘争の廃止に、圧迫されている国々の闘争を国々の廃止に役立てようとする意志として、また階級闘争と隸属諸国の闘争を統一調整し、それによつて相互に強化しあう意志として、革命を定義することに致達する。”なんたる革命の定義。なきないまでに権力に鈍感な姿勢。UGAC は第四インターの見解を密輸入しているのだ。かつてミンエル・ハプロは語つたものである。“われわれの運動は無条件に、即ちその政治指導部の階級的性格から独立して反帝植民地革命を支持する。かくしてたとえばナセルがプロレタリアートではなく、産業民族ブルジョアジーの生成核を代表しているという事実にもかかわらず、また彼が彼の国内で労働運動を弾圧しているという事実にもかかわらず、われわれは反帝国主義としてのナセルを支持するものである。”国家構造に対する完全なまでの分析の欠落は、UGAC をしてアナキズムを「修正」させるに到つたのである。

UGAC の修正「アナキズム」は、ソ連、中国等の現状分析から、

独自の観点である **△新しい過程** なるものの発見に努める。この **△新しい過程** はただ単に UGAC の現状認識の甘さからくる幻想なのではなく、UGAC の立場そのもの、UGAC の自称革命的アナキズムそのものからの派生なのである。国家の歴史過程に関して、バクーニンなりウエーヨなりのすぐれた考察があるが、アナキストであるかぎり、革命の基盤を国家の内に構築し、えるなどという発想をしたものはなかつた。そして革命を生産力の向上といつしよくたにするような発想も全くなかつた。さらには、自治管理が国家管理と平和的に共存しえるなどという幻想をいだくものもいなかつたのである。UGAC はこれらすべてを破棄した。

UGAC の **△東** に対する分析と評価を少し見てみよう。“ソ連では経済は経済的 **△独占** の絶対的な表現である国家にもとづいて、技術官僚主義的全体主義を生んだ。……”

しかしマルクシスト的国家を弱体化しようとする革命的な要素が存在する限り、**△全体主義化** は後退してゆくものとみられる。一九一七年の革命をふたたび起すべきではないが、それは継続すべきである。“問題は極めて明白である。国家を弱体化しようとする革命的な要素が存在するのは、国家の内ではなく人民の内にであるということ。そして現実に継続している革命などということ

代物は全くどこにも存在せず、継続しているのは国家に抵抗する人民の鬪いだということである。国家の権力構造を粉碎するためには一九一七年の革命を再度起すべきなのである。UGACの言う△新しい過程▽とは中国の文化大革命において典型的に発現しているように、国家独占資本主義から官僚制国家資本主義への過程のことなのである。まさにこの限りにおいて“ソ連に存在する新しい官僚階級は、すべての△社会主義▽国にもまた革命中の第三世界の中にも生れていることを確認しなければならない。”のである。カストロ主義者や毛沢東主義者のペテン師的役割は、国家に対する人民の不満と要求が革命そのものを起こす限界前に、一部の反対派的官僚群を追放することによつて人民の支持をとりつけ、国家を延命させることにある。そして日常的には、革命によつて生れた人民機関を国家の下うけ機関として吸収しようとする政策を、つまり反革命的政策を一貫して展開しているというのが事実である。ロシア革命からボリシエビキ国家による反革命への過程に関するUGACの見解は、第四インターと同様にスターリンを非難しレーニン・トロツキーを擁護するものである。さらにUGACは生産手段の所有に関して、社会の所有のうちに国家の所有と共同的所有の二種類の形式を設定するが、この混乱が評議会制の分析を困難にし、自治管理の内容を歪曲していることに

△評議会にふれて▽の章において述べる。私たちの世界情勢分析にあたつて重要なことは、△社会主義▽圏とか帝国主義圏とかの区別と連闊にあるのではなく、権力構造それ自体の歴史過程において国家、正確には中世以後の国民国家が今や最終局面に向かえていることをは握ることにある。国民国家は現在すでに頂点をきわめたか（官僚制国家資本主義）、もしくはその一步手前（国家独占資本主義）にまできているという事実に立脚して、国民国家が、最大最強の権力構造によつて構成される全体主義的地球国家へと飛躍的に構造展開することを阻止し、地球評議会の形成へ向けて革命を準備するという観点を確立することが、私たちにとって現在急務の問題であるだろう。

△革命にふれて▽

UGACの雑然たる手紙は、革命の眞の定義であるとして諸機構を顛覆する行動を挙げる。革命とはかかるネガティブなものなのであらうか。私はハントの定義を採用する。“ある新しいはじまりという意味で変化が起り、暴力がまつたく異なつた統治形態をうち立て、新しい政治体を形成するために用いられ、抑圧からの解放が少なくとも自由の構成をめざしているばあいにのみわれわれは革命について語ることができるのである。” UGAC

の所有と共同的所不の二種類の議会制の分析を困難にし、自治管理の内容を歪曲していることに

ついては、後に

は△進化▽と△革命▽を統一して、構造更新の路線を採用している。それは次のように言われる。△搾取社会の古い力が、新しい思想によつて、新しい生産関係によつて大衆と個人との新しい必要によつて、毎日少しづつ弱体化する時、進化は存在する。古い力は抵抗する。そして関係が変わった時古い社会機構は崩壊する。それが革命である。“ここでは問題は二つある。一つは、ここに言われるような進化は實際には改良でしかなく、構造更新は平和的に行なわれることは決つしてなく、平和的に獲得しうるのはオコボレ的改良のみであるということ。つまり、構造更新はペーパープランであつて、現実にはそのような過程は存在しえないこと。それでも△一つは、力関係が構造更新の結果として変化するものでない以上、その前提に立脚した革命といふものは有在しないといふことである。ただ言えるのは革命そのものの過程においてただその内においてのみ進化はありうるということである。例えば、一九一七年二月から十月のロシア革命の過程においてそれが見られる。革命とはかつてそうであつたように、ある朝突然に、というイメージを独占するものなのである。そして革命においてもつとも変化したものは、人間と物との関係ではなくて、人間と人間との関係であるということは記憶されておきに価値がある。革命過程とは国家と評議会の二者択一の死闘であり、評議会にのみ革命実質を見るのがアナ

キストであり、國家にしがみつく権力主義者がマルクス主義者なのである。つまり、既成の権力構造が破壊された時点においては、アナキストの革命はマルクス主義者の反革命であり、マルクス主義者の革命は革命実質にとって反革命なのである。両者の間に共有すべき課題は何一つなく、あるのは非和解的な闘争のみである。UGACは、革命的であることがアナキストとマルクス主義者の共通項になりえると亡想するのであるが、それはUGACが革命の実現すべき目標が何かを見失なつた結果のようである。

UGACの手紙をおおう色濃い経済主義と低次元の政治性は、新たなる混乱をひきおこすことにすら失敗している。UGACは政治力学主義とでもいうべき致命的な水準から革命の課題に対応しようとするが故に、第三世界の△革命運動▽に無批判的に追従することによって、なにをなすべきかという主体的な問題意識に具体的には何一つとして答えない。このようにUGACにとつて問題のは、何をなすべきかではなく、何をなすべきかの前にあるものなのだとすることがわかる。UGACはアルジエリアにおけるベンベラをすら支持する。次善の策はついに最善の策を生むことなく、どこまでも果しなく革命から遠ざかっていくのである。彼らは自からの運動を形成せずに、それを△参加▽によつて置き換えるが故に、彼らは不本意ながらも結果として反革命に参加し

てしまふのである。UGACの最も政治力学主義的対応が顕著であるのは、彼らの△東▽に対する態度においてである。UGACの立場では官僚制国家資本主義は国家独占資本主義よりも△未来▽なのであり、△未来▽であることは無条件に支持されるべきものであるという発想に陥っているのである。UGACは革命的マルクス主義者が階層とよぶ官僚を階級であると正しく規定するにもかかわらず、それへの対応においては単なる改良闘争をのみ主張して政治革命を放棄することによって、事实上第四インター以下の純粹に反帝一本の△反帝革命戦略▽を導びきだしている。UGACの革命路線の水準は、革命的マルクス主義と全く同一基盤に立脚するものであり、アナキズムというよりはむしろマルクス主義のアナキズム的変種とでも名づけるべきものであろう。私たちは、日常的にスターリニズムといつて批判するところのものが、実はスターリニスト党以上にトロツキスト党の内容物になつてゐるのだということを、けつして忘れてはならない。トロツキストは、その権力への志向において、スターリニスト以上ファシスト以上、考えられる限りにおいて現在最大の官僚階級自主候補生なのである。ロシアの革命過程においてソヴィエトを破壊するのに最も功績あつた者は誰なのか。この答はもはやアナキストの内では誰の目にも明らかなものとなつてゐる。

なるほど彼ら（マルクスとレーニン）はジエファーゾンの区制をほとんど知らなかつたけれども、最初のパリ・コミューンのセクションがフランス革命ではたした革命的役割を十分よく知つていた。ただ彼らは、それを新しい統治形態のとりうる萌芽であるとは考えておらず、革命がいつたん終結すれば消滅するはずの、たんなる道具であるとみていた。しかし、今や、彼らは、明らかに革命後にも生き残る意図をもつた、コミニーン、評議会、レーテ、ソヴィエトのようないくつかの人民機関に直面したのである。これは彼らの理論にすべて矛盾しただけでなく、もつと重要なことは、彼らが、破滅し、消滅したレジームの支配者たちと、無意識のうちにではあるが、共通して抱いていた権力と暴力の性格についての仮定と、はなばだしく対立した。彼らは国民国家の伝統にしつかりと根をおろしていたので、革命を権力奪取の手段として考え、権力を暴力手段の独占と同一視していた。しかし、現実に起つたことは、ふるい権力の急速な解体暴力手段にたいするコントロールの突然の喪失、その存在を人民自身の組織的本能以外の何ものにも依拠しない新しい権力構造のおどろくべき形成であつた。いかえれば、革命の瞬間がやつてきた時、わかつたことは、奪取すべき権力は残されていないということであつた。そこで革命家たちは、彼ら自身の革命前の「権力」、つまり党機構の組織を消

續あつた者は誰かのたゞの名前だけ、

たちは、彼ら自身の革命前の「権力」、つまり党機構の組織を消

目にも明らかなものとなつてゐる。

滅した政府の真空となつた権力中心部におくか、あるいは、自分たちの助けなしに発生してきた新しい革命的な権力中心部に、ただ合流するかといふ、どちらかといえば不ゆ快な二者択一に迫られた。』（ハレント）

△評議会にふれて▽

UGACの評議会に関するあれこれは、生産手段の直接占拠!!自治管理から出発して、”実際には直接管理は国家的管理と競合しつつ、直接管理者たちと官僚階級の擁護者たちの間の永続的な闘争の中で存在することとなる。直接管理の勝利は革命の勝利であろう。”という結論を導きだす。ここでは評議会が経済構造としてしか握されていないのである。私たちはここですべての歴史上の評議会を想起しなければならない。評議会とは一体何んであつたのか。評議会はそれ自身においてまずなによりも政治的自由を表現したものであり、それは社会的な統治形態として自足するために、一切の権力構造の部分（下うけ機関）となることを否定した存在であつた。しかも評議会は政治構造であることによつてはじめて経済構造にもなりえたのである。これらのことはユーゴスラビアの労働者評議会を考察する上で重要である。

ユーゴの労働者評議会はその内部に經營委員会をもつが、これは

国家権力構造の下部として機能している。經營委員会の生産計画を決定するのは、政府政策である金銭的刺激制度にそつていかに多くの利潤をあげるかという観点である。利潤の大部分はボーナスとして企業の労働者に配分されるというわけである。このことだけからでも私たちは、ユーゴの労働者評議会は決つして労働者評議会にはなつていないと断言することができるだろう。政治性を完全に政府に取りあげられた経済性のみの労働者評議会とは、まさしく企業であり、御用組合である。しかもこのよろな傾向は、キューべでもアルジエリアでも急速に強固なものとなつていて。UGACの経済主義的傾向は政治構造の分析を欠落させていたが、ここではその帰結として評議会の政治性が全く見落されているのである。注意しなければならない。これは単に未熟であるということによつてすまされるような問題ではない。UGACの一貫した植民地「革命」の支持は、その一表現である。UGACは第四インターと同列において”ペトナム革命勝利！”をスローガンとするだろう。だが私たちは、”ペトナム人民勝利！”としかスローガンとしては採用できないのである。問われているところの問題が革命の内容そのものだからである。南ペトナム解放民族戦線の闘争は、国民国家の形成を目的とする△革命▽なのであり、そこにおいて私たちが支持できるものは、抑圧に抗する人民の闘い

であり、政治的自由の直接的な実現をめざすものではなくともその原点になりうる、人民自身の闘争であるという、その闘争の主体に限られるからもある。ベトナム人民勝利は同時にキューバ人民勝利、中国人民勝利、アルジエリア人民勝利であり、全世界人民勝利の個別表現であるにすぎない。UGACの政治性におけるゆきあたりばつたりの方針は、革命運動の中心課題ともいえる革命家の組織と革命の組織についての区別と連関の考察を一切欠落させている。“評議会が挑戦したのは、あらゆる形態の政党制そのものであつて、この闘争は、革命から生まれた評議会が、いつも革命をその唯一の目標にしてきた党を相手にするばあいは、かならず強められた。眞のソヴィエト共和国という前衛的な觀点からみると、ボリシェビキ党は、消滅したレジームの党のどれよりも危険であるばかりか、同じくらい反動的なものである。統合形態にかんするかぎり——そして評議会はどのばあいでも、革命党と異なつて、革命の社会的側面よりも、政治的側面にかぎりなく関心を払つた——、一党独裁は、一般的にいえば、国民国家の発展の、特殊には、多党制の発展の、それぞれの最終段階にすぎない。”（ハレント）目的としての人間全個人の形成をめざす革命は、マルクス主義的な政治革命→社会革命→文化革命路線によつては達成さるべきもないし、逆にアナキスト構造更新派の

文化革命→社会革命→政治革命路線によつても成功は期待しがたい。革命は政治・社会・文化の全領域を、それぞれの水準において評議会制が確立されることを意味する。次のようなハレントの考察は、中央集権に対する単なるアンチであるバクーニンの△下から上へ▽とか、△地方から中央へ▽というような発想を完全に超克しているものとして評価することができるだろう。それは地方から中央へではなく地方△全国なのである。

“この（評議会制の）システムのどのレベルでも代表は特別の信任をえていた人々であつた。たしかに、この統治形態は、完全に発展させられたばあいには、やはりピラミッドのかたちをとつたであろう。もちろん、それは本質的に権威主義的な統治の形式である。しかし、われわれが知つてゐる権威主義的な統治は、どのばあいでも、その権威が上から下へと通つてゐるのにたいして、このばあいには、権威は上部や下部で生まれるのではなく、ピラミッドの各層でそれぞれ生まれるのである。これは、明らかに、自由と平等をいかに調和させるのかということではなく、平等と権威をいかに調和させるかという、近代政治のなかでもつとも重大な問題の一つにたいする解答となるだろう。”私たちはここで歴史上の個々の評議会の分析を通じて、私たちが獲得すべき評議会の様式を明らかにしなければならないのであるが、私には今その

革命は、マルクス主義者によるもの

の様式を明らかにしたもの

ための時間がない。この章のしめくくりとして最後に、再びハンガリアの引用を参考として掲げておくにとどめたい。“たとえばハンガリアの場合（一九五六年）、あらゆる居住地域に出現した地域的な評議会、街頭における共同闘争のなかから成長してきたいわゆる革命評議会、ブタベストのカフェで生まれた作家や芸術家の評議会、大学における学生・青年評議会、工場の労働者評議会、軍隊の評議会、公務員の評議会等々があつた。このような種々雑多な集団のなかにそれぞれ評議会がつくられた結果、多かれ少なかれ偶然的であつた近接関係は、一つの政治制度にかわた。この自然発生的な発展のなかで、もつともおどろくべき局面は、これらのいちじるしく雑多な独立機関が、全国を代表する會議の代議員を最終的に選挙することができるところの地域的・地方的性格の上級評議会を形成しつつ、整合と統合の過程をはじめると、ロシアのばあいは、数週間、ハンガリアのばあいは数日しか、かかつていないとあることである。

△おわりに▽

UGACが提示した手紙にふれて、内容とはいささかくいちがう三つの標題をつけて簡単に検討してみたわけであるが、私たちは、手紙の内容から学ぶものは何もなかつたし、反面教師として

の意義すら得ることができなかつた。私たちは私たちの“なにをなすべきか”を問う前に、私たち自身の問題点を整理していく作業から始める他はない。UGACの手紙はアナキストの廃出物なのである。ただ、私たちは、UGACの革命への志向と、この手紙を生んだ情熱に対して、心からのおみみない賛辞を送るものである。

本文は十二月の京都アナキズム研究会における報告として記されたものに若干の加筆修正を加えたものである。対象になつた論文は『世界の同志への手紙』「現代アナキズム研究」第一号所収のものである。
(六九年一月)

追記 発表を機会に書き改めることをしなかつた。この一年に私は大きく前進したので、『改書』できなくなつてしまつたのである。にもかかわらず発表する意義は当時の水準を知るためにも、これ自体にあると思つてゐる。

9.23 集会批判声明

アナキスト革命連合 (A.R.F.)

現在の反権力斗争は己の思想の、己の存在の表現としての斗争であるという認識を基本的水準として把握することを迫るものとしてある。故に斗争（根底的意味における）なき思想などはない。我々が既成アナ研に対し研究と斗争の分離という方法論に対して批判をして来た根拠はそのような現状認識にある。

これが我々が本日△中浜哲遺稿集出版記念座談会▽および△講演と討論集会▽の主催者・共賛者に対して粉碎を宣言する根拠である。

明確にすることを要求する。
そして、その戦後責任の追求は戦前の運動に対する自己批判を明らかにすることへとつながつてゆかなければならぬ。
戦後責任を明確にする中からこそ遺稿集出版という事業は本来的になされるべきなのである。戦後責任を明確にしないままに、あるいはしえない故に遺稿集出版を行うことは、己の戦後責任を隠ぺいしようとするものとして我々は把え糾弾する。

オールドのこのよな無責任さ、日和見さは私的場において開かれるべき、お彼岸の中日の本日の中浜哲を偲ぶ会へ遺稿集出版記念座談会▽を全くあいまいな半公開の席において行うという無神経さにおいて現われている。このような私的場と、運動の場とを混同したオールドの立場は運動の私物化を意味し運動にとつては阻害するものとしてある。

以上のような理由によつて、我々は△中浜哲遺稿集出版記念座談会▽を糾弾し粉碎する。

1. △中浜哲遺稿集出版記念座談会▽の性格と根拠
についての批判

我々は中浜哲（ギロチン社）の客観的事実としての遺稿集出版に対してはなんら異論はない。

我々はまず、主催者（オールドアナキスト）に対して、戦後20数年なんら運動を形成しようという努力をしなかつた己の責任性を

2. △9.23 講演と討論集会▽実行委および共賛者の主体的根拠と性格に対する批判

年なんら運動を形成しようという努力をして

夏の部における△中浜哲遺稿集出版記念座談会△の主催者であるオールドから場を提供され、それに無批判的にのつた夜の部の主催者（実行委）および共賛者の体質とは何か？

それは第1にオールドの戦後責任を追求しえないだけでなく、彼らは無批判的に追従するような体質であり、それは実行委の体質が全くオールドと同一であるということを証明しているのだ。

第2に、当世流行のノンセクトを看板にして、N.O.A等の講

師を招待することによつてしか集会を組織しえないことにも現われているごとく、ノンセクト運動に対する評価という局面での問題提起を、自らの運動と、それがいかに闘つてきたのかという、もう一つの局面を無視して問題提起をしようとするような週刊誌の編集者の態度として表出されざるをえないような体質なのである。

第3に、ARFが集会粉碎の態度を明確にした後にも、「京阪神アナキスト全集団共催」の集会であるとか、共賛の意を全く表示していない集団の名称を勝手に共賛の中に加えたりするような、運動者以前的な体質である。

我々ARFは△記念△することによつて、オシャベリすることしか出来ぬ主体はもはや運動主体ではなく、運動の阻害物でしかないと考へるが故に、△記念△を表出させたところの思想を粉碎

し、同時に△系譜△の思想を破碎する。そして、集会を自らの運動展開過程から位子付け組織することを放棄してマスコミ的論理においてしか集会を組織しようとしないという実行委の運動主体としての根拠点の消失を糾弾する。かゝる発想の基盤をこそ批判し、自己批判し、運動としての形成を押し進めるのでなくてはならない。

3. △ARFの運動の方向△

ARFをその一環とするアナキスト革命派における今日的基本的運動の方向は、明確に社会革命運動の水準における全国連合集団の形成にある。かかる目的意識を具象化するにたるだけの主体的力量を、われわれは、現在的には保持しえていない。にもかかわらずわれわれは、その時々の主体的力量をふまえて反権力斗争を、状況的課題の内に展開しないわけにはいかない。

状況的課題、それは現在、反安保斗争としてわれわれの前にあらわれ、われわれは、社会革命運動集団の創出へ向けて、この状況的課題といかに關係するのか。われわれの運動の展開過程と密接不可分である、國家権力の抑圧に対して、われわれは個別的防衛斗争に終始している。

かかる現在的限界を突破しうるにたるものとして、各地区に斗

争主体としてのアナ研を形成していかねばならず、同時に、社会

革命を目的意識的に追求するとのできる運動集団を形成することが、日程にあげられねばならない。研究も又実践としてあらねばならず、研究と行動とは真に実践として統一されていなければならぬ。

われわれは、具体的な斗争過程の内によつてしか眞の連帯を形

成することはできず、その端緒形態として、個別職種に規制されない斗争集団としての地区アナ研を創出するのでなければならぬ。

い。

70年反安保政治斗争を政治革命運動の最終局面と化さしめ、70年代社会革命運動を主体的に、になうためにも、今日のわれわれが要請しているところのものは、明らかに飛躍のための質的強化である。

(69・9・23)

△ △ 中浜哲遺稿集出版記念座談会▽粉碎行動についての総括

我々はオールドに対して、戦後20数年なんら運動を形成しよう。という努力をしなかつた己の責任を明らかにするよう要求した。己の戦後責任を明らかにする中からこそ、出版、集会活動を提起してゆかなければ何ら運動形成の活動たりえず、あいまいな主体的立場からの出版、集会提起は結果的に運動総体にとつて阻害物とならざるをえない、として集会を批判したのであつた。

しかし、オールドは批判している我々の立場を全く理解しえず、"敬老会"の席を乱す我々に戸迷いと怒りを現わしただけであった。このようなオールドの反応のし方は彼らの生活埋没者の立場を、保守的立場を露わにしたのであつた。

粉碎集会における我々の印象を言うならば、まさに我々は現体制を目前にしている断絶感とでもいゝるものであつた。

△ △ △ アナキスト革命派の秋期全国連合斗争を共に形成せよ！
△ △ △ 斗争主体としてのアナ研を創出せよ！
△ △ △ 反権力・絶対自由
△ △ △ 国家制社会を解体し、評議制社会を樹立せよ！

さて、この粉碎行動において明らかになつた事態とは何であつたのか？

問題点は2つに集約される。

第1に、我々は集会の性格、オールドの体質を批判の対象とし、粉碎の対象として設定した。しかし、我々は結果的にオールドのプログラムを根底的に粉碎しえず、変則的な形においてプログラム進行を許してしまつたことである。

このことの意味は、我々の『粉碎』の内容であるオールドの立脚点を具体的に場所的、時間的に露わにするということを貫徹しえなかつたということである。このような我々の粉碎行動の結果は我々の対権力斗争の現状と照應している。この我々の限界性をこのバランス状況を突き崩す方法は何か？ということが問われなければならない。

第2に、彼らオールドの集会中途からの内部崩壊の原因は何であつたのか？を明確にしておかなければならない。

まず主要な原因是集会主催者内部においてさえも集会の性格について確認されていなかつたのであり、オールド各自の生活環境の相違からくる生活感情（これがオールドにとつて思想なのか？）の喰い違いが、我々の問題提起を無視し過去の思い出だけに耽るうとする部分と、我々に対しても自己弁解を試みる為に討論集会的

な色彩の集会に切り替えようという部分とに別れた。この分裂が彼らの内部崩壊の原因であつた。しかし、オールドは共通して我々の問題提起に対して何ら答えようとしなかつたし、答え得なかつたということにおいて、彼らオールドは全て生活埋没者の的であり、己は体制的存在であるということを露わにしたのであつたと我々は確認する。

◇ △ 9・23 講演と討論集会▽粉碎行動についての総括

我々が実行委に対して突きつけたのは、昼の部において我々が批判したオールドから場を提供され無批判的に受け入れることによって体質的にオールドとユ着し、集会を斗争主体（思想）形成以前的むしろ週刊誌の編集者の立場から提起した実行委の立場、体質に対する批判であつた。

しかし、昼の部においてそうであつたように、彼らは我々を理解し得ず、あるいは理解していても、体制内化した己を運動の地平において把えることを意識的にか、無意識的にか拒否し、自己弁解をしたり、もつぱら討論内容をゴマかすことに努めたのであつた。その中において我々は実行委の体質が、今までのアナキズム運動の発展を阻害してきたものであることを明らかにしようとしましたが、結果的にはM氏の狡猾な対応のし方に対するゲバント行

使によつて、遂に明らかにしえなかつた。

我々は実行委が意図した実会開催を我々の問題提起によつて阻止したが、我々が意図した△粉碎▽を貫徹し得なかつた。

我々は今、アナキズムは総体的に見れば、全く運動形成以前の状況下にあり、アナキズムは個人の奥深くに反（嫌）政治性、反（嫌）権力的志向性としてあるにすぎないと確認せざるをえない。

そして、此で強調しておかなければならぬのは、アナキズムは

決して個人のアーナーキーな衝動による行動、怠だな心情を支える思想ではなく、明確に“変革の思想”として現われてこなければならぬのであり、今こそアナキズムは社会革命思想として、大衆的に獲得されなければならないのである。（69・9・29）

（文責）アナキスト革命連合（A.R.F.）事務局

10・21 北大阪叛乱 11月全都総叛乱へ

怒濤の進撃を開始せよ！

△総武装を獲得せよ！

全国のアナキスト諸君！

全関西のアナキスト・革命的無党派諸君！

第一に思想的に武装せよ！

われわれは思想的組織的に武装すると同時に、軍事的にも武装しなければならない。全民民の武装は自からが武装することなしには開始されないが故に、可能なかぎりのありとあらゆる軍事的武装が研究、生産、収奪を通して、永続的に獲得されるのでなくて

△反権力・絶対自由・国家制社会を解体し、評議制社会を樹立せよ！という A.R.F. の原則スローガンを表させたところのアナキズム革命思想を自から形成し体得することなしには、いかなる行動も運動とはなりえない。10・2阪芸大斗争において明らかになつた体質は深く批判されねばならず、それを通しての質的飛躍が獲得されるのでなくてはならない。

第二に組織的に武装せよ！

行動を運動へと飛躍させるためには自からを組織しなければならず、自からを組織することなしにはいかなる運動もありえない。

この任務を自覚しえぬ一切のエセ・「アーナーキー」どもは、自己の根源的な私人主義・サークル主義・分権主義的欠陥を自覚しえぬが故に、現在的に分解を深めている。斗うすべてのアナキストは共に A.R.F. を形成し、反安保状況斗争をにいつつ、それをより一層強固なものとするためにも、斗争主体としての地区アナ研創出していくのでなくてはならない。

第三に軍事的に武装せよ！

はならない。かかる重要な任務を実践しない一切の集団は、現実の状況斗争をになることはできず早急に分解し消滅せざるをえないだろう。

すべての斗うアナキストは自から思想的組織的軍事的武装——総武装を獲得しなければならず、総武装集団としての A.R.E を共に形成しつつ、総武装から総叛乱を創出すべく斗い抜くのでなくてはならない。

△総叛乱へ進撃せよ▽

全国のアナキスト諸君！

全関西のアナキスト・革命的無党派諸君！

反安保状況斗争を現実に主体的力量をふまえて斗い抜くことなしには、われわれは状況斗争を社会革命運動へと質的に飛躍させることはできない。

マルクス主義新左翼諸派の主張する70年安保斗争を、

斗争主体としてのアナ研を創出せよ！

反安保状況斗争を革命的に推進し、社会革命運動を創造せよ！

反権力・絶対自由・

国家制社会を解体し、

評議制社会を樹立せよ！

あり、同時に、社会革命の質を内包した反安保状況斗争の主体的革命的推進のための斗争である。

われわれは 10・21 北大阪叛乱——11 月全都総叛乱の一環を主体的にになうことにより、新左翼諸派によつて歪曲されてはいるが、明らかに△直接行動▽であるところの生産の自治管理を志向する斗争、革命戦略と一致した斗争戦術を基本的に支持し、これと連帶した行動を断固として革命的に展開しつつ、状況斗争そのものの勝利をめざすのではなくてはならない。かかる方向においてアナキスト革命派は、10・21 北大阪叛乱——11 月全都総叛乱へ怒濤の進撃を開始するのではなくてはならない。

全国のアナキスト諸君！

全関西のアナキスト・革命的無党派諸君！

10・21 北大阪叛乱——11 月全都総叛乱へ自由戦士は怒濤の進撃を開始せよ！

総武装を獲得し、総叛乱を創出せよ！

アナキスト革命派は秋期全国連合斗争を、最もラジカルにして最も多称に斗い抜け！

動を政治革命運動の最終局面と化さしめ、70 年代社会革命運動を創造するために、今日のすべての斗うアナキストに要請されいるところのものは、断固たる新左翼の革命的解体のための斗争であり、同時に、社会革命の質を内包した反安保状況斗争の主体的革命的推進のための斗争である。

アナキスト革命連合（A.R.F）
・関西地方評議会（準）

10・21 斗争を社会革命運動

の第一歩とせよ！

アナキスト革命連合（A.R.F）

10・21 斗争を結集した戦う革命的学生・労働者諸君！ 60年代運動を特徴付けていた、政治的プロパガンダ斗争の一つの締めくくりとしての意義を持つと同時に、全面的な社会革命運動への転換という意義を持つ、この10・21斗争を正に主体的に担い、かつ次代の運動を切り拓くため、アナキスト革命連合（A・R・F）は大阪中央電報局に於ける反戦派労働者の斗いに合流し、労働者評議会建設への突破口とする意思をここに明らかにする。

革命運動とは個別諸斗争相互の社会關係を把握し、個別斗争に表出されている社会状況の本質を明らかにすることによつてのみ、形成され得るのだ。そうでない、革命運動、は、問題を政治斗争としてとらえることによつて無制限に前衛党論に突き進むものでしかない。

60年安保斗争以降原潜、日韓、砂川斗争と続いて来た、主として新左翼諸派によつて担われた運動は、この10年間に安保体制が根を降ろしてゆく過程にあつて、それに対する抵抗として現われた、大衆の政治意識の触発という志向性を持つた、先駆性理論を

基本とするものであつた。これは日共の民族民主路線、社党の平和主義路線という、ブルジョア議会主義に廻いこまれた、安保体制を一片の条約文の問題にワイ小化させる思想を一步乗り越えて、安保体制の具現化された諸状況に対する直接攻撃という思想を形成させた。

対権力斗争を担う者の主体性を示し得たという意味で、新左翼諸派の運動は評価されねばならない。

60年安保以降の運動の過程にあつて、明確に質的深化の契機となつたものは砂川基地斗争であつたと考える。出発点において個別斗争としてあつた問題意識が、権力との直接対決を設定することによつて、問題は単に個別状況として留まらず、反体制運動總体の中でとらえられて行つたといふ過程があつたからこそ、羽田佐世保、三里塚、更に東大、日大斗争へとつながつた運動の発展が勝ち得られたのである。正に、60年以降の先駆性論が一定の程度を持つて乗り越えられたのは、東大、日大斗争であつたといえる。政治理念の面から個別状況に対する斗争を提起して行く従来の型を脱して、個別状況に於ける“個”的存在の矛盾を表出させる方向で斗争が提起され、それが政治意識と結びつく形で思想の深化が行われると考えるからである。そこでは政治的前衛が斗争を指導し、全てを権力斗争に集約するという限界が、例え部分的にせよ打ち破られているのである。現下の状況に於ては、政治的課題をかゝげなければ、より以上の斗争が組めないことは事実であり、また個別斗争を継承して行くことは不可能なことは勿論である。

学園斗争が真に個別斗争であつたのは、東大、日大斗争までであり、今年一月の状況以降においては、明確に普遍的課題として斗わざれて来たのだ。そして70年斗争という段階にまで突入した現

在、全共斗運動も政治斗争として斗わざれなければならないことは必然なのである。こゝにおいて、10・21斗争が激烈な街頭斗争として斗わざねばならぬ理由がある。何故なら、街頭にも敵として体制的秩序が存在するのであり、それを打ち破る斗いなくして70年斗争を普遍的課題として提起し、大衆の意識を流動化させることはできないからである。

労働者・学生が“市民”としてそれぞれの状況に封じ込められながら、体制の秩序を担つてゐる現実を暴くしなければならない。我々は思想をコトバのみによつて表わすのではなく、行動によつても表出せしめねばならない。今、何が起りつゝあるのかといふことを社会空間の中に、一つの状況として具現化しなければならない

△自由と革命▽ 第二号……12月発行

虚実論（1）・日野善太郎 △地区評議会 1 地区アナ
研▽路線への飛跡・小池創生 全共斗運動の質的転位
のために・池田和義 10・2 阪芸大斗争をめぐつて等

△連絡先▽

大阪府茨木市春日一丁目九の二一

A R F 編集局

△お知らせ▽

地区アナキズム研究会（関西地方のみ）への参加希
望者は A R F 編集局まで連絡を下さい。